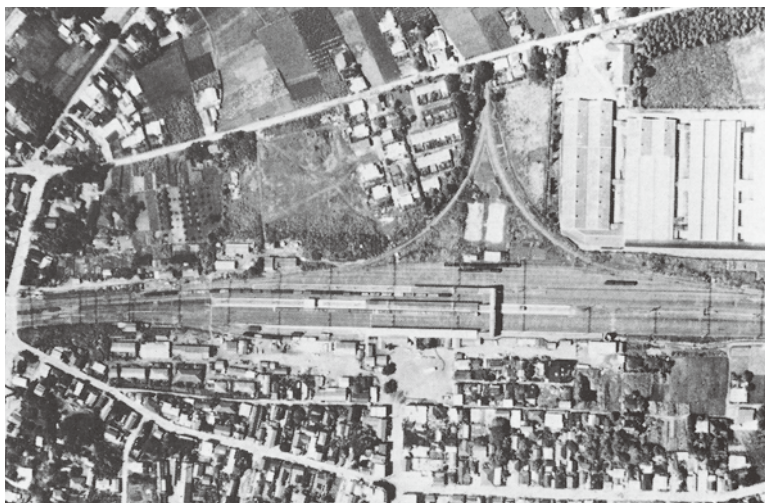




上空から見た友部駅と扇線

かさまのれきし

第54回



友部駅昔ものがたり

友部駅は、明治二十二年（一八八九）の水戸線開通時には、まだ設置されていませんでした。友部駅の開業は、明治二十八年、常磐線開通よりも少し早い七月一日でした。駅名は、大字名「南友部」の地名から名付けられています。

さて、友部駅が設置される前は、どのような土地だったのでしょうか。古地図を見ると、現在の友部駅周辺は南北にわたり原野で、狸や狐が住み、付近の農家の草刈り場であつたようです。現在のJCT友部工場敷地から鴻巣および東側は、一面の松林でした。また、南西部には雑木林が続き、その間を並木が宍戸から水戸坂、そして現在の友部里道踏切（友部駅の西側の踏切）から県立中央病院の南側に延び、鯉淵街道となっており、淋しいところでした。鯉淵街道のほかに、宍戸から南友部、小原を経て、三軒屋（水戸市）を結ぶ杉崎街道もありました。

明治になって鉄道が敷設されますが、当時の人々には、よく思われなかったようです。

それは、蒸気機関車から出る火の粉によって火事になることを恐れたからだと考えられます。これにより、人家から離れたところに鉄道が敷かれました。

友部駅の開業の折には、機関車転向用の扇線の中に芝居小屋をつくって、祝賀の行事が賑やかに行われました。土浦線（常磐線の二部、友部・土浦間）が開通した頃の友部駅については、明治二十八年十月六日付け「いはらき」で、「友部は、水戸線及び土浦線の連結の駅で広大であり、将来、盛大になるだろう」と予想しています。友部駅周辺に、宍戸や北川根、大原地区から移住し、記事の通り、友部は駅を中心として、現在まで大いに発展しました。

最後に、明治の末期、当時の友部駅長赤熊才次郎が、六百本の桜苗を皆で駅構内に植樹したと言われています。大正・昭和の代になりますと、いずれも大木になり、遠近から花見でたくさんの方が訪れました。

（市史研究員 福島 和彦）